

【音楽科】教科提案

テーマ「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習 ～《ことば・動き・音》を関連づけて音楽の基礎・基本を育てる～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

音楽科研究テーマ《「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習》を掲げて3年次となる。本校の研究主題《「意味と内容」がひろがる学びの創造》に対応して、音楽科の「基礎・基本とは何か」「教育内容の適切性」を求めて設定したものである。

1年次は研究テーマから「見る・聴く」を焦点化した。成果としては、鑑賞指導の充実を中心課題として幅広いジャンルの鑑賞教材の収集や量的拡大などができた。2年次は「愛する」を焦点化した。この力を一方で支える「表現する力の基盤を育てる」を中心課題に取り組んだ。成果としては、《ことば・動き・音》それぞれに関連づけて学習を展開するところに、子どもたちの創意・工夫が発揮され、表現にも高まりが見られた。そこで3年次は音楽科の研究サブテーマを次のように設定し、成果を期することにした。

～《ことば・動き・音》を関連づけて音楽の基礎・基本を育てる～

学校提案では、「子どもの創造的に思考する力や豊かに表現する力など主体的な能力を育む」ためには、「互いのまなざしが響き合う学習」が有効ではないかと考えている（全体仮説）。

音楽科においても、「知識 (knowledge)」の教育とともに、「技 (skill)」の教育の中に「創造的に思考する力」「豊かに表現する力」を育てることが「能力 (ability, capacity)」の教育として重要な今日的課題である。

教室での学びの中で「互いのまなざしが響き合う学習」を想定するとき、そこには成立する条件として、子どもたち一人一人において〔①成長・発展への志向、②学習の技能と基盤、③自己制御（コントロール）の基盤、④心理的な基盤〕の4つがお互いに関連し合って必要となろう。

本年度は、《ことば⇔動き⇔音》はもちろんのこと、《動き》を核に《ことば⇔動き》《動き⇔音》の焦点化、あるいは《音》そのものに対峙しながら「創造的に思考する力」「豊かに表現する力」をキーワードに全体仮説の検証を行いたい。

(2) 音楽科でめざす子どもの姿〔問題の所在〕

「音楽が好きだ・音楽を自分で（工夫して）歌ってみたい・自分で（工夫して）演奏してみたい・自分で作ってみたい・いろんな音楽を聴いてみたい・友だちと一緒に音楽したい・友だちが好きな音楽にも興味がある・友だちの音楽表現にも興味がある」という子どもの姿をめざす。

つまり、自分に合った生活スタイルを見つけて「自分を音楽で豊かにし、生涯音楽の基盤を手に入れようとする」子どもたちである。同時に「工夫して音楽を表現したり、友だちとのかわりからも、自分の音楽的世界を広げていったりする」子どもたちである。

一言でいえば、「音楽を聴く・音楽する楽しみが分かる」子どもたちである。

そのためには、音楽的「知識 (knowledge)」「技 (skill)」「能力 (ability, capacity)」が3つがバランスよく教育されることが必要であろう。音楽科でめざす子どもの姿を次のようにした。

音楽的「知識 (knowledge)」「技 (skill)」「能力 (ability, capacity)」の3つが、
バランスよく身に付いている子ども。

私自身の反省であるが、音楽的「能力 (ability, capacity)」の教育に幾分重心をかけ過ぎて、「知識 (knowledge)」「技 (skill)」の教育を少し後ろに追いやってきたようである。バランスが悪い状態である。たとえ音楽的能力があっても、知識や技がなければ子ども自身に音楽的展開があっても発展はないであろう。ひとえに指導者側の問題である。

本校の子どもたちに目を移すとき、よく歌いよく表現する。さらに音楽に対して開かれた心を持っている。しかしながら、中学校での学びを視野に入れると、楽曲を成り立たせている諸要素を比べて聴いたり、音楽的に考えて表現したり、音符や記号から音をイメージして表現したりする活動ではまだまだ課題が多い。知識と技を、如何にして生きたものとして子どもたちの身に付けていくかが問われている。

2. 音楽科学習における「互いのまなざしが響き合う学習」

学校提案でいう「まなざし」とは、子どもが学習を進めていく上での「対象への見方・考え方」と同時に、子どもが自分の学習を成立させていく「心理的な基盤（支持的風土、学級の中での有用感・自己充足感、学習対象への関心・意欲・態度等々）」を指すものであろう。つまり、子どもの学びの姿を、心理的な基盤を大切にしながら子どもの相互作用を生かして総括的に観ていこうとするものである。ここで大切なことは、活躍する一部の子どもたちではなく「すべての子どもたちが、如何にして「互いのまなざしが響き合う学習」を可能とするかである。

音楽科においては《「感じ」を共有・「気づき」を課題に》をキーワードに、これまでも子どもたちの心理的な基盤を大切に「全員が分かる授業」をめざし取り組んできたところである。例えば、広範な教材収集と教材提示の工夫・発問の工夫、黒板開放や挙手法、バズ学習法等を使った学習時の情報交流等々である。本年度は課題プリントの活用やペア学習を含む小集団グループ学習を取り入れることによって、「互いのまなざしが響き合う学習」に迫りたいと考えている。

その際の留意点として、教育学的知見から学級集団の「集団力学の作用」を活用したい。

【集団力学の作用】

①相互誘発（連鎖反動的）、②相互葛藤（集成、吸収、拒否）、③相互補足

さらに、学級集団の持つ発言や考えの多様性＝「提案、同意、反復、追究、示唆、疑問」等も留意すべきことの視野に入れる。

1学期の行った研究授業（次頁本文中）に見るように、子どもが進めていく「全員が分かる・できる」授業の実際の場面において「同時一斉に全員のまなざしが響き合う」ことは稀であろう。むしろ「ない」に近いといった方が適切かもしれない。子どもたち一人一人の違った学習レディネスに対応して、異時・多発的に起こるとイメージする方が現実的かつ具体化に馴染むであろう。

ここでの課題は、プラス・マイナス両極端にある「学習課題をすべて自力で解こうとする子どもたち」への働きかけの質と場の設定である。幸い音楽科では、教科の特性として1人では表現しきれないあるいは複数で表現する方が豊かになるといった学習内容〔アンサンブル〕がある。

関わって学ぶことの大切さを、課題設定、教材提示の段階で工夫することが必要となろう。

【校内研究授業：第2学年「ドレミであそぼう」(2006.05.31)成果と課題から】

◆ (課題プリントとペア学習を使った) 授業の中での響き合いの姿はあったか。

「響き合い」を、(協力して学習課題を達成していったか) という観点で捉えるなら、

- ①協力をして学習課題を達成していった子ども。
- ②協力なしに自力で学習課題を達成した子ども。
- ③協力したが学習課題を達成できなかった子ども。
- ④協力も達成もなかった子ども。

の4つに区分することができよう。

本時では、④に該当する子どもが1名あったが次時には①となり解消された。題材を終える段階で③④は一人もなく、全員が①ないし②であった。当初は①が多く授業の経過とともに②が増えていった。最初から②であった子どもは、(協力)というよりは友達の学習をリードしたようである。すなわち、「響き合い」は同時一斉(多発)的ではなく、学習の進度の差異によってそれぞれの子どものに合った状態で行われていった。

(結論) 題材全体を通して「響き合いの姿」(はなはだ文学的で曖昧であるけれども)は、それを必要とする子どもの中には見られた。一方、学習課題を自力で解こうとする子どもには、どんどん課題を進めていくこと自体が目的化されていて、「響き合い」を判別することが困難であった。

3. 研究の展望

(1) [研究の内容と範囲]

◎子どもたちが「自分を音楽で豊かにする」ために、

- ①授業前において、ねらいを明確にして広く教材の収集・選択・制作に努める。
- ②教材提示の工夫で音楽への関心・意欲を高める。
- ③授業展開の中で、少しずつ「自己決定」をさせながら音楽とのつきあい方を身に付けたり、技術的な困難さを克服したり、自分から進んで音楽に取り組もうとしたりする態度を育てる。
- ④心身の発達に合った学習指導過程(例は下枠内)を組むことで、豊かに音楽を感じ取る心を育てる。

真似や繰り返しを喜ぶ低学年では、モデル効果を重視するとともに、ていねいに十分な繰り返しを織り交ぜながらねらいの定着を図る。身体を動かすことが大好きな間は、身体から音楽的な要素を入れていく。とりわけ聴感覚・聴機能に優れている中学年頃をめどに、様々な音や響きの聴き分けを楽しい活動の中に仕組んでいく。高学年では知的好奇心を刺激して幅広く音楽に触れさせていく。等々。

◎《工夫して音楽を表現する》ために、

- ⑤聴き比べたり、表現して比べたりする活動から、音楽的な判断力を養う。
- ⑥音楽の様々な組み立て方(順序性やしぐみ)を、聴いたり表現したりする活動から、音楽的な思考力として定着させていく。

◎さらに《生涯音楽への基盤》を保障するために、

⑦教材に（視覚的な）モデルを用意して、子どもたちに目標感をもたせる。

○幅広い種類の（映像も含めた）鑑賞教材を収集を図る。〔第1年次の研究範囲〕

⑧小・中学校を通じた学びのひろがりをもたせ、（小学校側から）意図的に用意する。

○表現及び鑑賞の活動を通して、表現する力の基盤を育てる。〔第2・3年次の研究範囲〕

◎「知識・技・能力」をそれぞれの題材で明らかにする。〔第3年次の研究範囲〕

（2）〔研究の方法・研究評価の手だて・適切なみとりと支援〕

①全学年を対象として発達の段階に応じて《ことば・動き・音》に焦点を当てる。

◎「手は外界に出た脳」といわれるほどに、非常に大きな刺激を脳にフィードバックする。

「手」が持つ機能性と《ことば・動き・音》の繋がりを関連づけることから、子どもたちの身に付けることができる音楽の基礎的・基本的能力を明らかにしたい。→「文節歌唱法」「コード視唱法」「拳手法」など。また、《動き》は即時性があり、子どもの内面をかなり容易に見取ることができる。うまくいかないときこそ、友達と結びつけられるチャンスがあり（支援）、学習が大きく展開するきっかけがある。

②課題プリントの使用による子どもたち相互の多様な「気付き方・感じ方」の発見。

◎課題プリントの使用によって、学習の足跡をたどることができる。また子どもたちの記述を追うことで、学習指導過程が適切なものであるかどうかの研究評価も可能となる。学習者相互の響き合いを生むためには、適宜、課題プリントの記載内容を一覧にして子どもたちに提示する必要がある。これによって他者への関心が生まれ、スキーマやレディネスの差を縮める効果を生むであろう。課題プリント使用の目的は、結果的に学習主体者である個人の確立をめざし、学習者による学習過程への共感《自己成長感の醸成》を求めるものである。

③場を設定する。

◎座席配置の工夫。→（男女）ペアによる教え合い。→グループ学習へ発展。

ペアやグループの編成については、当初は出席簿順など機械的に行うが、次第に指導者が持つ教育的直感によってフレキシブルに考えていく。組み合わせ方によって様々な結果の生まれることが予想されるが、必ずしもうまくいかない組み合わせから「場の設定の工夫」の留意すべき点が生まれることを期待する。

（3）〔研究評価の視点〕

①音楽的な「知識・技・技能」を、誰もが真似のできる簡単な《動き》に集約できたか。

②課題プリントの使用や一覧表示によって、すべての子どもたちの学びが変化したか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたか。また学級の子どもの学びが、客観的に「響き合う」様相を見せたといえるか。

③座席配置の工夫や子ども同士を結びつけることで、すべての子どもたちに学習の深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが積極的に学習できるように改善されたか。